

## 災害と在日商工人

～ 1930 年代阪神消費組合の活動を中心に～

フリーライター 高 東 元

兵庫県尼崎市の高潮塔



阪神電鉄尼崎駅前にある中央公園の片隅に、「高潮塔」がある。過去、この地を襲った水害で発生した高潮を示したものだが、いちばん高くにあるのが 1934 年 9 月

に大阪湾岸の都市を襲った室戸台風の 5.1 メートルだ。3 月の東日本大震災で発生した津波により東北地方は大きな被害を受けたが、尼崎にこの塔があることを思い出し、見に行こうと思ったのである。堤防も未整備だった時代、低湿地でバラック平屋住まいが中心だった在日韓国人の多くが室戸台風の犠牲になった。室戸台風に限らず、日本で発生した災害で在日の多くが被災したが、一方で同胞団体などによる救援活動も活発に行われていたことを記憶にとどめておかなければならないだろう。

### 北但馬、北丹後大震災と在日韓国人

筆者がこの地に来たもう一つの目的は、尼崎韓国商工会議所（兵庫韓国商工会議所尼崎支部）の定期総会に参加することであった。新たに選出された李剛士会長は建設業界の方である。見た目も性格も豪快だが、一方で筆者のような者に対しても気遣い忘れない人である。会合などでお会いすると、右手がつぶれるんじゃないかと思うくらいの力で握手し、「元気でやってますか」とシビれるような笑顔で声をかけてくれるのだ。昔も今も土建業は力仕事のため、どんなに不況でも人、特に若いモンを確保しなくてはならなかった。しかも昔は在日の親方たちは村の若者を率いて海を渡り、日本各地を転々としなけれ

ばならなかったのである。仕事は厳しいが一生涯面倒を見るぞ、という人望がなければ人が集まらないし、また元請にも信用されない。李会長はそんな昔ながらの「韓国人親方」イメージぴったりの人である。1910 年の韓日併合前から韓国人は日本で建設業に従事していたが、現場で彼らを取りまとめ、危険でキツイ仕事を確実にこなしていく親方の存在が欠かせなかったのである。兵庫県から京都府にかけての但馬、丹波地方もまたそうであった。1920 年代、山陰本線や舞鶴 - 大阪間の阪鶴鉄道などの建設、円山川改修など大規模工事がこの地域で相次ぎ、多くの韓国人労働者がこの事業に従事していた。そのさ中の 1925 年 5 月、但馬地方をマグニチュード 7 の震災が襲ったのである。昼食の準備していた城崎や豊岡の女性たちが火事の犠牲となった。円山川改修工事に携わっていた韓国人労働者が被災者救援活動を行ったのがこのときである。彼らは親方に率いられて猛火に飛び込み、泣き叫ぶ子どもや女性、身動きの出来ない老人たちを片っ端から救出し、100 名以上を安全地帯に避難させたのであった。その後も復旧活動に携わり、新聞では韓国人たちは道路補修や家屋修理等に奔走し、「同地方民から感謝の涙をもって迎えられている」と報じられた。1 年後、兵庫県知事から救援活動の功績者 18 組が表彰を受けたが、うち 5 組が洪承俊、朴在祥、金化祥、文三貫、裴三鶴ら韓国人親方たちだったのである。

1927 年 3 月、今度は京都府北部をマグニチュード 7.5 地震が襲い、死者 2,925 人という大惨事が発生した。震災の翌年発行された「奥丹後震災誌」によると、救援活動に従事した「鮮人土工」崔龍讚氏のことを紹介されている。彼は近隣の人々を救助し、その後もボランティア活動を行い、憲兵隊の井上上等兵により「誠に義侠的で美事」と上部機関に

報告されていた。またこの震災に東京日本橋で古タイヤ業「首陽商会」を営む李海容氏が義援金を拠出し、「日鮮融和の実を示し称賛を得た」とある。1923年の関東大震災で「井戸に毒を投げ込んだ」等のデマで多数の韓国人が虐殺されたのは、ほんの数年前のことであった。北但馬、奥丹後の震災でもやはり警察や軍は「朝鮮人暴動の恐れ有」を理由に治安出動したが、日本人はもう恐怖心によるデマに惑わされなくなっていたのである。関東大震災の韓国人虐殺に対して日本は世界中から激しい非難を浴びたが、その後日本人自身も自省し、韓国人もまた災害時において民族を越え助け合ったのであった。



北但馬震災の救援活動を伝える神戸新聞 (1925年5月29日付)

### 阪神消費組合の結成

1925年2月、日本各地の在日韓国人労働団体の代表が集い、構成員3万3千名を越える在日本朝鮮労働総同盟(朝総)が結成された。朝総は日本労働運動の左派で共産党の指導下にあった日本労働組合全国協議会(全協)と強い協力関係にあったが、1929年12月、当時の執行部が「あらゆる民族的闘争を放棄し、真実に左翼労働組合として闘争しなければ階級的諸権利を得られない」として朝総を解体し、全協に組み入れるという決定をして解散してしまっただのである。「階級的諸権利」等々の共産主義の主張はともあれ、これまで朝総を現場で引っ張っていた活動家は戸惑った。差別的賃金や「半島出身」を理由

とした誹首、劣悪な住宅環境など労働問題と民族問題は切り離すことができないからである。何よりも全協自身、韓国人の構成員が3~4割に達していたにもかかわらず、韓国人幹部は組織内で出世できず、危険なピラ配りや武装デモ動員など「弾除け」扱いされていた。ちょうど世界恐慌の最中であつた。物価は天井知らずで生活は日々脅かされていたが、韓国人活動家たちは全協に所属しつつ最優先の民族問題、つまり生活権の確保を目指した。食料品等を公正な価格で仕入れ、廉価に同胞に販売するという消費組合活動に力を入れていくが、その最大組織が1931年3月尼崎で結成された阪神消費組合(阪消)であつた。理事長は芦屋で綿工場を経営していた安泰云氏で、その他の理事には生協の全国組織である日本無産者消費組合連盟の中央執行委員にも選出された金敬中氏、そして後に兵庫県本庄村村会議員に選出され、解放後は初代在日本朝鮮人連盟兵庫支部長となった朴柱範氏が就任した。阪消は労働運動出身者が中心に運営されていたが、安理事長のような商工人や日本人なども参加していたのである。当時の京阪神は「ソウルに次ぐ韓国人消費地」であつたため、阪消は本国まで韓国食品を仕入れに行っていた。しかし生産者からは現金取引しかしてもらえず、釜山などの韓国人商人には日本人より1割高く売りつけられ、労働運動への弾圧で幹部が相次いで逮捕されるという有様だったが、消費組合活動は年々定着し、「くみあいマーケット」は同胞の生活に欠かせない存在となっていっただのである。

### 室戸台風と韓国人の救援活動

1934年7月、韓国南部を席卷した水害に対し阪神消費組合は救援運動を起こし、朝鮮日報社を通じて140円を送金した。続いて9月、大阪湾岸一帯が室戸台風襲われたのである。災害続きの年であつた。台風の被害で阪神間の同胞家屋6千戸が罹災し、死者90名、重軽傷者627名、行方不明者276名にも上った。阪消はすぐさま救援活動を展開し、まず罹災組合員200戸に白米60kgを配布

# 濁流と闘ひつゝ、

## 壯・廿數名を救ふ

人命の前に家など構はぬと

東初島 金快成君の美談

「神戸新聞」の「東初島」欄に、昨午（廿九）日、東初島町金快成君の美談が掲載された。君は、昨午（廿九）日、東初島町に大規模な水害が発生した際、人命を第一と心得、自らの家財を犠牲にして、周囲に溺れようとしていた女性や子どもを救った。君の勇気と犠牲精神は、多くの人々を感動させた。君は、この大規模な水害の際、自らの家財を犠牲にして、周囲に溺れようとしていた女性や子どもを救った。君の勇気と犠牲精神は、多くの人々を感動させた。君は、この大規模な水害の際、自らの家財を犠牲にして、周囲に溺れようとしていた女性や子どもを救った。君の勇気と犠牲精神は、多くの人々を感動させた。

し、1日3回の炊き出しを実施したのであった。また被災した人々にとって最も切実なのが住居である。本国では災害を受けて「関西風水害救援金」が募られていたが、阪消はこの救援金を引き受けて住宅資金を作り、尼崎市立花にバラック25戸を建設して被災同胞に36ヶ月の低額ローンで売り出したのである。そして回収された資金で再びバラックを購入して住宅事業を継続していったのであった。また当時の新聞では神崎川沿いで古物商を営んでいた金快成氏の救援活動が掲載されている。台風のため堤防が決壊し家が浸水してしまった金氏だが、避難のため屋根に上ってみると周囲には濁流に飲まれようとしていた女性や子どもが大勢いた。彼は素っ裸になって水に飛び込み、20数名を自分の家の屋根に上げて命を救ったのである。彼自身も家財を失った被災者だったが「人の命を救うためには家などどうでもよい」と語り、この報告を受けた尼崎警察の藤本署長ら全員が感激したと報じられている。

災害救助に国境はない。特に地震や台風などの自然災害が多い日本では、このことを教訓にしなければならないであろう。今も東日本大震の復興もままならない中、各地で水害などが続いている。この地に住む私たちは、

困ったとき互いに手を差し伸べ合うことのできる隣人であり続けなければならない。

### 【参考】

- ・堀内稔著「兵庫朝鮮人労働運動史」
- ・兵庫朝鮮関係研究会編「兵庫の大震災と在日韓国・朝鮮」、他

### 【高東元氏プロフィール】

- ・兵庫朝鮮関係研究会会員
- ・本業は人事コンサルタント